南極で書や絵

風書家・月風かおりさん

雪原に布を広げて「風道開」

墨と筆で世界各地の風景を表現する「風書家」の月風かおりさんが今年1月、日本の芸術家で初めて各国政府隊の一員として南極を訪れ、白い雪原で書の活動をしました。9日から東京で展覧会も開かれます。（今井尚）

南極の雪原で書を書く月風かおりさん＝南極・エスペランサ基地近く、どちらも本人提供

外国の基地で

月風さんはアルゼンチンのエスペランサ基地に約1か月滞在しました。日本の昭和基地とは4千キロほどはなれた、南極半島の先端にあります。

基地の周囲はペンギンの営巣地になっていて、氷河に囲まれています。1月は南極の夏。それでも気温は高くて5度、低いと零下15度ほどになります。月風さんは真っ白な雪原に長さ6メートルの布を広げ、白い和服に身を包み、大きな筆を握りました。書いた文字は「風道開」の3文字でした。

「南極観測は、おもに科学者のもので、芸術という分野は南極ではまだまだ許されていません。そこに新しい道を開き、新しい風を入れたい。そんな思いからこの字を書きたかった」と話します。

風景を墨で表現

ふだんは東京の百貨店で毛筆文字を書く仕事をする一方、世界各地に出かけ、そこで見た風景や感じた風を墨で表現しています。

書道を始めたのは小学1年生の時。おてんばで、少し落ち着いてもらいたいと願った両親が書道教室に入れたそうです。

10歳のころ、住んでいた愛媛県新居浜市の自宅が台風で半壊。そのときに風の持つ力に興味を持ち、以来、台風が近づくたびに家を飛び出すほどだったといいます。

これまでにアメリカのアラスカや、アフリカのサハラ砂漠などをオートバイで走ったり、南アメリカのパタゴニア氷河を旅したり。そのたびに作品を作って発表してきました。

南極は長年あこがれていましたが、日本の南極観測隊には今のところ、芸術家が参加できるわくがありません。今回は、月風さんの願いをよく知る国立極地研究所の人が、アルゼンチンが芸術家を同行させるプログラムを行っていることを知って紹介してくれたことで実現しました。

「南極は大きな可能性を秘めた土地だと思います。それは芸術家にとっても同じです」。月風さんは今後、「もう一つの極地、北極への夢を胸に、風書を書き続けたい」と言います。

展覧会『風書展』～南極の風～（共同展）は13日まで世田谷美術館（東京都世田谷区）で開かれます。

南極で書いた「風道開」